

前途遼遠な外国語学習

藤 井 史 郎

中学校から英語，大学からはフランス語を勉強し四捨五入すれば約半世紀にわたりこれら外国語の修得に時間を費やしてきた。世間では，外国語をマスターしたと自認してはばからない人たちも多いようであるが，こと私の場合は未だに両外国語ともマスターしたと公言する自信はない。

若い頃，外国語は年齢に比例して語彙など自然に増えていくものと思っていた。大学院での指導教授は，パスカルの定理・ヘクトパスカルに今もその名を残す，フランス十七世紀の偉大な数学者・哲学者であるパスカルの研究者であり，フランスでも名の知られた泰斗であった。当時六十二，三歳でいらしたと思う。ゼミ中に突然先生よりフランス語の単語の意味を聞かれた。その後も幾度か繰り返されたが，尋ねられた単語はかなりありふれた普通名詞であった。パスカルの『パンセ』であれば知らないことはないという大学の先生が，私でも中級程度の段階で習った単語を学ばなかったはずはありえない。おそらく忘れてしまったのだろうと推察された。その時私は，外国語の語彙は年齢と比例して増えていくのではなく，なんらかの努力をしなければ専門以外の語彙は忘れていくものかもしれないと思い始めた。なんとかしなければいけない。そこで私が再開したのはその昔にしていた単語帳作りであった。中学校で英語を学び始めた時もそうであったが，私は市販の単語帳に初出の単語を書き取り，辞書にあたり発音記号を書き写し，意味を記すのが好きであった。この習慣は高校時代へと続いたが，なぜか大学の途中で中断されてしまっていた。こうして思いがけず大学院に入ってから単語帳作りを再開したのである。そして単語帳作りは途中何度かの中断はあったものの今でも続いている。

外国語の勉強の中には，文法，作文，会話，リスニングなど様々あるが，私がかつても大切だと思うのは語彙力養成である。昨今，英会話の必要性が叫ばれているが，たとえ外国に行っても単語さえ分ればあとはどうにかなるものである。単語が分らないのは文法が分らないよりも致命的である。そして力を付けるのが難しいのもまた語彙力なのである。

日本語でもそうであるが，常に新しい言葉が生まれる一方で，別な言葉は死んでいく。日本語ならば日常的に耳にするのでその気になれば新語彙・知識を得ることもさほど難しくはないが，日常的に耳にしない外国語の語彙を減らすことなく更に新語を含めて語彙を増やしていくには，日々のかんりの努力が必要である。なにかをしなければ現状維持どころかどんどん外国語の語彙は減るばかりである。

外国語はその字のごとくあくまで自分の外なるものであり，おそらく一生かかっても

自分の内なるものすなわち母国語と同等のものにはなりえないだろう。もともとそのような外国語をネイティブと同じように発音し運用し理解できるようになるということ自体が無理なことなのである。なんとか自分の意図するところを相手に伝えることができ、相手の言うことが分り、なんとか文章も書け、読むことができる、すなわち外国語を使うには常に「なんとか」がつきまとわざるをえないのだ。

ところで語彙が大切だといっても、単語をひとつ覚えたところで何の役に立つものやら分らない。私自身、単語帳を増やしながらかような無力感に襲われることもある。そのような時思うのがフランスの作家カミュが『シジフォスの神話』中で描き出したシジフォスの幸福である。シジフォスはギリシャの神々により、休みなく岩を山の頂上まで転がして運び上げる刑罰を課された。山頂に達すると石はそれ自身の重さで麓まで落ちる。神々は、無益で希望のない労働以上に恐ろしい刑罰はないと考えた。シジフォスは営々としてこの刑罰に従う。転がり落ちる石を見据えながらシジフォスは裾野へと降りていく。そして再び石を山頂に運び上げ始めるのだ。カミュは無益な労働に従うこのシジフォスを幸福であるという。なぜならば、シジフォスはこの不条理な労働に意識的に立ち向かっているがゆえに、各瞬間ごとに自らの運命に打ち勝っているからである。石を山頂に運び上げてしまうことが問題なのではない。その運び上げるプロセスにこそシジフォスの幸福があるのである。

外国語を学ぶことには、このシジフォスの運命を思わせるものがある。先にも述べたごとく、もともとマスター不可能に近い外国語を学ぼうとすること自体が不条理な行為なのである。今までの人生のほとんどをかけて外国語を学んできた私もいささか不条理にとりつかれた人間なのだろう。選択した外国語をいつマスター——外国語の山頂に立つこと——できるとも、またいつ役に立つかも知れず単語帳に新出の単語を記す行為は、シジフォスの無益かつ不条理な刑罰に似ている。にもかかわらず、私はそのような不条理な労働を自分に課している自分を時に幸福に思うことがある。というのも外国語には完成がない以上、一生努力しなければならないプロセスが続くからである。

この先何年勉強が続けられるか分らないが——息絶えるまで続けるつもりではいる——、怖いのはボケである。学んだ順番からいえば、まずフランス語を忘れ、次に英語を忘れ、さらに日本語の固有名詞を、最後には普通名詞を忘れ恍惚の人になっていくことだろう。ボケないために、今日も一語は単語帳に記すことのできる新語探しの旅に出ることにしよう。

(奥羽大学歯学部英語学講座)